

研究ノート

バリの風土と家系についての考察（V）

松 原 正 道

序

筆者は、本研究紀要第38号に、イスラム教国インドネシアに、如何に同教が波及して行ったか、また、イスラム化して行ったかについて考察した。

イスラム教の東漸については、陸地からのそれと比べ、海路、所謂、「海のシルクロード」経路での伝播によるが多かったと言うことであった。

陸上からのそれは、様々な民族との関わりと、それに伴う抵抗があったということから、800年の歳月を要してインドに到達したのに対して、海上のそれは、イスラム教が興ったのと同じ、7世紀末には100年足らずでインドネシア地方にまで、特に、スマトラ（島）にそれが到達していたことが知られている。

その点で、「海のシルクロード」からの伝達の早さということが知れると共に、そのことから、インドネシアの地に至る海上交流が古くから盛んに行われていたということが分かるのである。

そこには、その伝達の仕方、それは、穏やかなもので、イスラム教を前面に出さずに、サラセン Saracen と言われるアラビア、ペルシア、そして、インドの同教徒（モスレム Moslem）が交易のために来航し、彼らが日常的に行っている信仰を、人々が自然の形で受け入れて行ったと言う経緯が窺い知れた。

陸上経路では、色々な民族が介在しており、それぞれの地での摩擦が長い時間を要させたのに対して、海上のそれは、陸上と比べると、海賊と言った障害はあるものの、それはまだそれ程ではないと言うことになるのである。

従って、このことを考えると、イスラム教が興った7世紀前半、その発祥の地アラビアと、それを受容したインドネシア地方との間に如何に多くの人々が往来していたかと言うことの証左と見ることが出来る。それも比較的平和裡に。

色々な曲折を経て、今日、バリ（島）のような例外はあるものの、インドネシア地方は、世界最大のイスラム教徒を抱えた地域であり、それが前号で見た経緯によるものであると言

うことである。

そして、それは、インドネシア地方では例外的存在と言えるヒンドゥー（バラモン）教の世界であるバリ（島）においても、イスラム教徒はおり、モスクMosqueもあればアザーン（祈りの呼びかけ）も聞くことも出来るということから、浸透の強さを感じさせられる。

こうしたイスラム教の実体がある一方、インドネシア地方には、キリスト教の存在も認められるところであり、それは、バリ（島）と言えども例外ではない。

今日、両教徒による紛争が報道されるが、そこには、イスラム教、キリスト教の同地における歴史とも何らかの関わりがあるのではないかと考えることが考えられる。

従って、イスラム教国インドネシア共和国と言う現実を踏まえて、この地域にキリスト教がどのように伝播し、受容されて来たか、また、歴史にどのように反映されて行ったかを、時の流れに従って探って行こうとするのが本稿の目的である。

特に、歴史上、最初に海外雄飛に乗り出したポルトガルの航海・探検の時代を中心にして考察を進めたい。

1

1143年、アフォンソ・エンリケAlfonso Henrique（1109頃—85 在位1143—）によって、統一スペインの前身であるカスティリアCastillaからの独立を果たしたポルトガルは、イスラム教徒とのオーリケOuriqueでの戦い（1139）に勝利し、教皇インノケンティウスInnocentius 2世（11?—1143 在位1130—）によって、「聖地奪還と同じ十字軍とみとめる」と言わしめることによって、その独立への道を確認たるものにしたように、以後の歴史においても、イスラム教徒との関わりを大きく持つことになるのである。

このように、ポルトガルは、その建国当初から、イスラム教徒との関わりを強く持っており、それは神の意を体した十字軍の戦いと同じ意味を以てのそれであったため、特別のものがあつた。統一後のスペインによって行われたもの（1492）よりも240年も早く、1249年、イベリア半島を支配していたイスラム教徒からの国土回復（レコンキスタReconquista）を成しとげたのである。

そして、それは、1270年に、フランス王ルイLouis 9世（1214—70 在位1226—）によるチュニジアTunisiaのイスラム教徒に対する戦いである第7回十字軍に先んじること20年であり、聖地エルサレムJerusalemをイスラム教徒から奪回すると言う初期の目的からは、性格が曖昧になっていたとは言え、未だ、十字軍の時代であり、イスラム教徒を排除してのポルトガル建国は、やはり、その風潮の中で行われた事業であり、それは、インノケンティウス2世に認められた如く、十字軍の一環とも言えなくもないのである。

従って、以後の、ポルトガルの海外発展は、常に、それとのからみで行われている。

レコンキスタによって回復した国土は、皮肉にも、封建貴族の地方的特権を主張するところとなり、中央集権化を計ろうとする国王と対立することとなった。そこで、国王は、貴族達と融和、また牽制する一方、その活動の場を海に求めたのである。

それは、ポルトガルの地理的条件を考えて見るならば必然と言えるものであり、ヨーロッパの西端に位置し、北と東を大国スペインに囲まれているため、その発展を考えた場合、スペインと事を構えるか、はたまた、大西洋へ出て行くしかないということになるのである。

そして、国王の中にはスペインと問題を起こす者もいた。

ユーラシア大陸最西端ロカ岬 ポルトガル

リスボア(ン)市街と大西洋
 左上 発見の記念碑 右 ベレンの塔(灯台)

フェルナンドFernando王(13?—83 在位1367—)の時、カスティリアからの干渉を招くことになり、海港都市ブルジョアジー、特に、リスボア(ン)Lisboaの海商達の支持を得て、ジョアンJoão 1世(1357—1433 在位1385—)が王位につきアヴィス(シュ)Avis朝が誕生する。

そうした王朝成立のいきさつから、同王朝は海外進出を必然なものとして、その後、積極的にそれを行うのである。

ジョアン1世の3男エンリケHenrique(1394—1460)は航海王子と言われ、「王室の一員たる大貴族として、父、兄ドゥアルテ、甥アフォンソ5世の3代にわたり、通商・植民担当の大臣に相当する地位を占め、アヴィシュ王朝の商業重視の傾向を代表し、同時に国内大貴族との平和のため、国民的エネルギーを北アフリカに発散させようとした」⁽¹⁾と指摘される彼は、ポルトガル西南端ザグレスSagresの「王子の町」で活動をするのである。

その様子については、「エンリケが自らの周りに宇宙形状学者、天文学者、医師等の一団を集め、その多くはユダヤ人であり一部はスペイン系ムーア人ですらあったこと、及びその長はマヨルカ島から来たユダヤ人やコメ先生であり、その父は有名な1375年の『カタロニア地図帳』の作者アブラハム・クレケスであったことが知られている」⁽²⁾と言われるように、偉れた人々を周囲に集め、航海学、地図学等の研究を中心に、航海と発見の指導と研究に携わらせた。

そして、「この1433年こそポルトガルの東方進出が開始された年であるといつてよい」⁽³⁾と言われるように、ジョアン1世が死にドゥアルテDuarte(14?—38 在位1433—)が王位につくと、「エンリケ王子にアフリカ大陸沿岸とマデイラ諸島に船を派遣する権利を認めた。これから以後の、エンリケ王子はヴィゼウ侯、アルガルヴェの終身総督、キリスト騎士団の管長という資格で、この地域における航海・探検事業を主宰することになった」⁽⁴⁾と言われる活動を始めるのである。

そして、そうして始めた彼の航海・探検事業の背景として、「第一の理由はボジドール岬の彼方の世界について知りたいという地理的好奇心、第二の理由は、今後発見される地域と交易して国益に供したいという商業的関心、第三の理由は、イスラムという敵と戦うためにはその実力を知る必要があるという戦略的理由、第四の理由は、イスラム世界の彼方にいると信じられていたキリスト教国の王プレスター・ジョン(ポルトガル語ではプレステア・ジョアン)を探索すること、第五の理由は、キリスト教を広め、異教徒を改宗したいという情熱」⁽⁵⁾と指摘されるように、後年、香料貿易に勤しんだポルトガルの対外発展策は、未だ、この時期には見られず、未知の世界を探ると言うこととキリスト教的使命、特に、イスラム教徒との関わりによるものが強かったと言える。

そして、「エンリケの時代にポルトガル人を航海に駆り立てた動機のひとつは、スーダンの

発見の記念碑

左端 エンリケ航海王子 3 番目 ヴァスコ・ダ・ガマ
リスボア(ン) ポルトガル

金の獲得であった」⁽⁶⁾と言われるのである。

既に、インドやその東の地域、中国や日本の存在については知られているところであり、やがて、そこへ航路を以て到達しようと活動を活発にするのだが、そのための航海・探検事業の端緒を開いたエンリケの時代には、未だ、その考えはなく、「航海王子」と言われながらも、その活動範囲はアフリカの沿岸にとどまりその活動には時代に伴った限界があったと言うことである。⁽⁷⁾

1415年、エンリケ自身も兄達と共に参加し、ローマ教皇グレゴリウスGregoriusⅡ世(1327頃—1415 在位1406—)から正式に十字軍として承認された、現在は、スペインの海外領になっている北アフリカのセウタCeuta攻略を始めとし、マデイラMadeira島(18)、ヴェルデVerde岬(41)、黄金海岸(71)、コンゴCongo河(82)等の発見に続いて、1588年のバルトロメウ・ディアズBartholomeu Dias(1450頃—1500)による喜望峰到達(1488)によって、インド、アジアへの航路が開かれるようになったのである。

この間、エンリケ航海王子は、1460年に死ぬが、それとは関わりなく、国策としての航海・探検事業は続けられ、ジョアン2世(1455—95 在位1481—)は、エンリケやそれまでの王達同様、政治と信仰をないまぜにした、東方に存在すると言うキリスト教王プレスター・ジョン伝説を信じ、これとの連絡をとろうと、東方航路開拓事業を更に展開するのである。

ジョアン2世が王子の時代、ポルトガルは、アルカンヴァス条約(●)でカスティリアのカナリアCanaria諸島領有を認める代りに、ギニアGuinea海岸、マデイラ諸島、アゾーレスAzores

諸島の独占権を獲得した。

これによって、カスティリアはアフリカ進出が出来なくなり、統一スペイン後にも西航を余儀なくさせられるのである。

ジョアン2世の命を受けたバルトロメウ・ディアズは喜望峰に到達したことによって、インドへの道の先駆者となったのである(1488)。

そして、ポルトガルの宿敵カスティリアとの戦いに従軍して優れた船乗りとしての名をあげたヴァスコ・ダ・ガマVasco da Gama (1469頃—1524)は、マヌエルManuel 1世(1469—1521 在位1495—)の命による、『『プレスティア・ジョアン』の王国、すなわちエチオピアと連絡をとることであり、もう一つはインドのカレクト王国におもむき、そこで国王と友好関係を結ぶことであった』⁽⁸⁾という目的を以て、1497年、4隻の船団を率いて船出をし、喜望峰を回航する航路を開拓して、インドの西岸のカリカットCalicutに到着(98)、ここに、念願の航路によるアジアへの道が開かれたことになるのである。

だが、コロンブスChristopher Columbus (1451—1506)の西航で、カスティリアのイサベルとアラゴンのフェルナンドとが結婚したことで成立した統一王国(スペイン)は、1492年に新大陸(アメリカ)に到達しており、彼自身、ここがアジアの一部であると信じ、それは、彼を通して、人々にもそう思わせることとなり、そのため、今日でも、彼および彼に続く冒険者によって探検された地域を、西インド諸島と言い、東のそれと区別しているが、コロンブスは、彼の言うアジアに到達していたのである。

その点では、ポルトガルは、スペインに後れをとったことになる。

その後もガマは2回インドへの航海を行い、同地に死ぬ。

そして、ガマが東航してインドに至る道を開拓したということとは別に、「航海の意義として忘れてはならないのは、インド、東南アジアを含むインド洋世界と、そこで行われている国際貿易に関する最新の情報を持ち帰ったということである。(中略)簡単なものであるが、とにかくインドから東南アジアにいたるインド洋世界がカバーされており、またアレクサンドリアでの香料の価格なども記録されている。おそらくこれらの具体的な情報と数字こそが、ポルトガル人を香料貿易に進出させるのにもっとも効果があったのではなかろうか』⁽⁹⁾と言われる如く、キリスト教を前面に掲げながらも、現実的利益のため、香料貿易を東進の大きな目的に組み入れ、以後のポルトガルの航海・探検事業の推進を促すうえで大きな影響を与えたガマの東航であった。

これにより、その後、東南アジアの諸地域、特に、インドネシア地方がポルトガルを介してヨーロッパと関わりを持つことになるのである。

ガマの後を受けた、カブラルPedro Alvarez Cabral (1467—1516)は、暴風雨や潮流により、ブラジルの海岸に漂着(1500)、その地を自国の領土と宣言するが、それは、コロンブス

の第1回航海に同行したスペイン人ピンソンMartin Alonso Pinzon（1440—93）の弟ヴィンセントVicent（1460頃—1524）の発見より2ヶ月後だった。

その後、カブラルは東進し、喜望峰經由カリカットに到着、コーチンCochin、カナノールCananoreにおいて土侯との間に通商協定を結ぶと共に、そこに商館を建設するのである。

次いで、リスボア(ン)の貴族アルメイダFrancisco d'Almeida（1445頃—1510）は、エマヌエル1世より初代インド総督に任じられると、東アフリカのモンバサMombasa等のイスラム教徒の根拠地を破壊した後、コーチンに到着、ここを拠点にしてカナノール等の海岸を制圧、エジプトのインド艦隊をインド西部のディウDiuで全滅させ（09）、ポルトガルのインドへの道を固める一方、東に転じ、マラッカMalaccaを攻略するのである（11）。

「セケイラの率いる船隊が、ヨーロッパ人として初めてマラッカの港を訪れたのは1509年9月であり、最終的にマラッカを占領したのは1511年8月のことである」⁽¹⁰⁾と言われるように初来航から3年にして、同地を占領すると言う素早いものであり、そこには、それをするだけの、同地に魅力があったと言うことであり、同地を中心に東南アジア一帯が、好むと好まざるとに関わらず、キリスト教を掲げたポルトガル人、次いで、スペイン人と直接、接触を持つことになるのである。

そして、やがて、イギリス人、オランダ人、フランス人とも。

アルメイダとの確執の中で、2代目インド総督になったアルブケルケAffonso d'Albuquerque（1453—1513）もリスボンの貴族で、1503年、マラバルMalabar植民地の叛乱を制圧し、コーチンに根拠地を建設、アフリカ東岸のアラビア人を攻め、その東方貿易の拠点、ペルシア湾口のオルムズOrmuz島を占領した後、1509年、総督に任じられる。

そして、ゴアを奪取し、ここに政庁を置き、東方経営の拠点とする（10）。

そして以後、この地は、20世紀に至るまでポルトガルのインドおよびアジアの経営のうえで重要な拠点としての役割を果たすのである。豊臣秀吉の辞世の歌として知られる「露とおち露と消えにし我が身かなゴアのこと夢のまた夢」と言うのがある。

更に、ここを根拠地として、1511年、セイロンCeylon（スリランカ Sri Lanka）マラッカを攻略、ゴアからモルッカMolucca（マルクMaluku 香料）諸島に至る航路をサラセンSaracenより奪い、要所要所に拠点を設けることによって、ポルトガル本国から香料の産地であるアジアへの海上の道がポルトガル人の手に帰したのである。

そして、その後、ポルトガルの海外進出の特徴としてのここに見られるような拠点確保に力がそそがれるのである。

だが、この拠点伝いの対外進出には、そこに至る長い距離が災いしており、それぞれの地点に存在する異民族、特に、イスラム教徒を力で抑えられている間は良かったのだが、そのためこれを維持するのに莫大なエネルギーを要し、これが同国の衰退の原因をもたらすこと

ポルトガル時代の城塞
ゴ(ゲ)ール スマトラ沖地震津波の被害地
セイロン(スリランカ)

にもなるのである。

そして、アルブケルケの部下の中には、広東省の上川島に足を伸ばした者もいた(16)が、そこは、後に、フランシスコ・ザビエル Francisco Xavier (1506—53) の最期の地となる所である。

14世紀後半、ジャワ Jawa (島) を中心に勢力を振っていたマジャパヒト Majapahit 王国の版図に一時期入っていたマラッカは、次いで、シャムの属領になったが、15世紀始め、ここを中心としたイスラム王国が建設され、これは明に朝貢していた。

15世紀初頭、シュリーヴィジャヤ(室利佛逝 S'rivijaya) の王族でパレンバン Palembang の貴族パラミシュアラ Paramishwara (パラメスワラ 年代不詳) が、マラッカに国を建て(マラッカ王国 1402) たことに始まり、海上交通の要衝、マラッカ海峡を擁しているということから、建国後20年にして活発な商業活動を展開、通商の拡大と共にマレー半島の西岸を始め、半島全域、ジャワ(島) 北岸、モルッカ(香料) 諸島に勢力を伸した。

建国者のパラメシュアラがスマトラ Sumatra (島) のイスラム国パセイの土侯の娘と結婚したことや、マラッカ在住のインド商人の影響によって、マラッカ王国はイスラム化し、やがて、同王国はアジアにおける一大イスラム教国へと発展して行くのである。

そのため、「15世紀の終わりのころまでは、東南アジアの中心的商業国家に発展した。しかも16世紀のはじめには、ポルトガル人にいわせれば、全世界でもっとも富み栄えた海港となった」⁽¹¹⁾といわれるように、同地は、ポルトガルにとって大変魅力のある所であり、これを武

力を以て手に入れたと言うわけである。

以後、そこを、同国の東方経略の拠点として、モルッカ諸島を含むインドネシア地方への進出、マカオMacauと共に、日本とインド、そしてポルトガル本国とを結ぶ通商の基地として繁栄を見るのである。

だが、一方では、ポルトガルが支配することでマラッカが、カトリック臭が強くなったため、イスラム商人はここを避け、スマトラ（島）のアチェAche王国やジャワ（島）のバンテンBanten王国等イスラム教を奉じる国々を相手として交易を行い、ポルトガルのそれに対抗した。

ポルトガルの航海・探検事業は、イスラム教徒の到来と違い、単に、交易だけでなく、常に、キリスト教＝カトリックの布教が表裏一体となっており、その一環として、ザビエルも1546年にアンボイナAnboinaに来島しており、そのために今日でも東インドネシアにはカトリック勢力が強く、近年の東チモール独立に際しての、政治的に独立派と反独立派との対立と共に、キリスト教徒とイスラム教徒との間の対立抗争も厳しいものがあった。

そして、それは「現代のアンボイナ事件」とも言える、アンボイナ島を始めとしてモルッカ（マルク）諸島における両教徒間の紛争をも生むことになり、それもこうした歴史的背景を持つものであって、この地域へのキリスト教の伝播は、イスラム教のそれが自然だったのに比べると攻撃的、かつ、強制的だったと言える。

「アルブケルケは、ポルトガルの優位は、陸上基地によってもまた保障されねばならない

ポルトガル総督官邸
マカオ 中国

こと一仮に少数の根拠地でも戦略要衝にあれば、それらによって、小なりと言え、断固たる決意を持ったヨーロッパの一国が印度洋の広大な周辺を制し得ること―（中略）こうした根拠地は一東に一つ、西に二つ、そして中央に一つの―四ヶ所もあれば十分であろう。アルブケルケはその非凡な洞察力を以て、版図の拡大したルシタニア（ポルトガルの古名）帝国を支える四本柱としてマラッカ、ホルムーズ、アデン、そしてゴアを選んだ」⁽¹²⁾と言われるように、点と点を結ぶことをその経営戦略としてとったのである。

そして、その戦略は彼の時代にはその指導力の故に成功したのである。

香料を求めたポルトガル人は、マラッカを活動拠点にして東南アジアに進出、中でも、香料諸島と言われるモルッカ諸島、バンダBanda諸島は魅力のある地域だった。

モルッカ諸島に進出したポルトガルは、アンボイナ（1512）を手始めに、テルナテTernate（22）、バチャンBacan（58）、ティドール（レ）Tidore（78）の島々に要塞を設けると共に、バンダ諸島にも要塞を築き（12）、ニクズク（丁字）の独占を計る等、この地域での活動を活発にしたのである。

こうしたポルトガルの香料諸島への進出には、1511年から12年にかけてのアルブケルケの指令により行われたアブラウを指揮者とする東インド諸島の探検があるのであって、マゼランFerdinand Magellan（1480頃―1521）も一士官として参加していたのであるが、一行は、スマトラ（島）沿いにスダSunda海峡まで航海してジャワ（島）の北岸を測量し、バリBali（島）、マドゥラMadura（島）、スンバワSumbawa（島）、フロレスFlores（島）等についての調査をして、その知識を得ているのである。⁽¹³⁾

従って、バリ（島）は、この時を以てヨーロッパとの接点を持ったということになる。

探検隊の一行は、更に、方向を転じて、ブルー、アンボイナ、セラムSeramの各島、そして、モルッカと共に香料諸島と言われているバンダ諸島を経てルシバラ、テルナテの島々に至るのである。

その後、更に、1514年、テルナテ（島）へ艦隊を派遣し、そこを、この地（海）域における中心地として、マラッカとの間に定期的往来が始まることになるが、小島ながら、南のティドール（レ）（島）と共に、香料貿易の中心をなし、島の土侯はポルトガル王に臣従する形をとった。⁽¹⁴⁾

こうしたこの地（海）域でのポルトガルの積極的な活動の背景には、スペインが、両国の分界線を定めた1493年の教皇教書に基づいた権利を主張してきたと言ういきさつがあったからなのである。

一方、アルブケルケは、ポルトガルからアジアにおける根拠地であるゴアへの海上ルート確保のために、従来、アジア貿易を一手に握っていたイスラム教徒のアラビア人、ペルシア人、そして、インド人を排除して、インド洋の制海権を手に入れるために、ゴアを植民地化

セントポール聖堂跡
マカオ 中国

し、ここに、「小ポルトガル」⁽¹⁵⁾を建設して万全の体制を整えようと計り、これに成功したと言える。

こうした彼の体制作りによって、ポルトガルは更にアジア進出に拍車を加え、後に、中国に拠点としてのマカオを得るのである。(1557)。

こうして始まったポルトガルの東インド諸島への航海・探検および、その地への勢力拡大の中から、既に、マルコ・ポーロによって知られている中国への接近があげられるのであって、マラッカ在住のピレス Thomé Pires (1524没) が最初の中国派遣使節として任命されマカオ、広東経由で北京へ行き明の武宗（在位1491—1521）に会うが、ポルトガルのマラッカ侵略や、地域一帯での行為を非とされて、彼は投獄され、やがて獄死する。

こうして始まった中国との接触から、明の海賊平定に協力したことの代償としてその居留が認められるようになったマカオは、マラッカに勝るとも劣らない重要拠点になった。⁽¹⁶⁾

そして、このようにして始まったポルトガルと中国との関係の中から1543年のポルトガル人の種子島漂着と鉄砲伝来と言う日本の歴史にとっての画期的出来事が起こるのである。

一方、インド洋貿易で競合していたペルシアとの関係については、それなりに問題はあったが、16世紀においては、両者の間はまずまずだった。

こうして東航策をとってアジアに進出を計ったポルトガルに対して、近代初頭のヨーロッパによる海外進出の競争相手になったスペインは、コロンブスの航海を援助したことに始まり、その後に続く、ポルトガル人マゼラン一行による世界周航（1519—22）等、西航をその政策として、これに対抗した。

そこには、ポルトガルと結んだアルカソヴァス条約が介在していることで東航策がとれなかったことと、なんと言っても、コロンブスによる壮大な、西航によるアジア到達と言う夢の実現と言うものがスペインには大きく働いていたのである。

特に、そうして得たメキシコを拠点として、太平洋を横断し、マニラを中心としたフィリピンにその勢力を伸ばし、アジアの諸地域にその地歩を固めようと計ったのである。

そして、メキシコとフィリピンの間にはスペイン船の定期的な往来がなされ、そうした中から、ポルトガル人と共に「南蛮人」と言われたスペイン人の日本渡来(1515)もあり、また、メキシコを発った船が、千葉県御宿海岸沖で遭難、その際、漂着した乗組員を土地の人々が救助し、親身になって世話をした「サンフランシスコ号遭難事件」(1609 慶長14年)という出来事もあった。

因みに、現在、このことを顕彰して、同地に、メキシコ共和国が建立した記念碑「メキシコ塔」が存在している。

ポルトガル、スペイン間の熾烈な探検・発見の競争の中で、こうした、両国の間での、新しく発見した土地をめぐる争いが絶えず、これを調停するために、教皇アレクサンデルAlexander 6世(1431—1503 在位1492—)の仲介によって決められた「教皇境界線」Line of Demarcation(1493)が設けられた。だがこれを不服として、両国が直接交渉して結ばれた「トルデシラスTordesillas条約」(94)によって、ヴェルデ岬の西370レグア(約2000キロメートル)の距離で南北に一線を引いた地点を境としたことにより、ブラジルがポルトガル領になったと言う取り決めによって、両国間の決着はみたまもの

メキシコ塔 御宿 千葉

の、アジアにおける両国の競合は、それはそれでまた別であり、香料諸島をめぐる競争には激しいものがあった。

そして、それは、かつて、アルブケルケの部下として活躍したマゼランの世界周航(1519—22)の途次の来航(1521)に始まり、1529年の「サラゴサ Zaragoza条約」によってスペインが補償金と引き換えに香料諸島から撤退したことで決着をみるまで続くことになる。

こうした、ヨーロッパ人による初期海外進出競争は、エンリケ航海王子の事業に始まるポルトガルと、レコンキスタを完成させて統一王国を誕生させた(1492)スペインがその勢い

を駆ってコロンブスの事業を援助したことにより両国で競われ、それによってヨーロッパ人による直接アジアへの来航がなされたのであるが、やがて、それは、オランダ、フランス、そして、イギリスにとって代わられることになる。

特に、ポルトガルの場合、1550年から1600年の間に、これまでの雄飛の傾向は次第に鈍いものになってきた。

そして、その原因の大きなものとしてあげられるのが、ポルトガルが小国であるということであり、ライバルのスペインと比べ、イベリア半島の西端に位置して、その大きさは比較にならず、それに付随して、人口も少ないと言う決定的とも言えるポルトガルの持つ条件があったと言えるのである。

アルプケルケによって築かれた「小ポルトガル」は、ポルトガルの国力と人口とにとっては過大に過ぎ、本国の人口が、疫病によって激減してしまったことにより、アジアへの人材補給が難しくなると共に、第一世代が高齢化して地域に同化しようと、人的資源の払底からその供給がうまく運ばなかったことが大きな理由であったと言えることが出来る。⁽¹⁷⁾

それと併せて、何と言っても、国王を始めとする為政者達がジョアン1世、マヌエル1世、そして、エンリケ王子のような覇気ある者がいなくなってしまうということであって、如何なる組織、それが、国であっても、有能な指導者がいなくなるとその組織は衰退すると言うもので、その点で、当時のポルトガルはまさにその通りであったのである。

そしてその結果、決定的な出来事として、上述の国内事情を反映して、フェリペFelipe 2世（1527—98 在位1556—）によって、スペインに併合されてしまった（1580—1640）と言う事実がそれを如実に示していると言える。

インドにおいては、やがて、イギリスとフランスが熾烈な覇権争いを展開して、結局は、イギリスが第二次大戦終結後まで、それを植民地としており、インドで破れたフランスはインドシナ半島をその植民地とし、同じく、第二次大戦後に至るまで保持したのである。

こうした中で、パリ（島）が含まれるインドネシア地方は、オランダによって影響を受けることになり、やがては、その植民地となるのである。

16世紀末、来島したオランダ人は、1512年に要塞を築いて以来特産のニクズク（丁字）を独占していたポルトガルから、アンボイナを1605年に、奪取したが、その後、間もなく、イギリスが、同地に、東インド会社の商館を設け、活動を開始したため、両国間に激しい競争が続いた。

1623年、オランダ側に使用されていた日本人が要塞付近を徘徊したのを端緒として、オランダ官憲がイギリス人10名、その他、日本人9人、中国人を処刑したため、イギリスの強硬な抗議が起り、英、蘭間の紛争の種となり、長い間、両国間の外交の問題となったが、1654年にオランダ側が賠償金を払うことで事件は落着き、67年ブレダBreda条約で解決し、オラ

ンダの支配権が確立した（アンボイナ事件）。

その背景にあるのが、モルッカ諸島等の香料独占を巡ってのイギリスとオランダとの競争であって、この後、オランダはイギリス勢力を排除してモルッカ諸島の支配権を確立し、その後のインドネシア地方におけるオランダの勢力拡大を促すものとなったのである。

マラッカ海峡の交易をめぐりアチェ王国、ジョホール王国、マラッカのポルトガル、新興勢力のオランダの四者がその時々事情に基づいて同盟の組み合わせを行い互いに鎬を削っていた。まず最初に、1641年、オランダ・ジョホール王国の連合軍に包囲され、ポルトガルが勢力を失い。次いで、ジョホール王国はオランダに圧迫され交易から遠ざけられ、海賊稼業を生業として海峡に残るか内陸部に小王国として逼塞するかのどちらかとなった。

オランダと言う強敵の出現は、ポルトガルの対外進出に多大な打撃を与え、その衰退を促したわけであるが、そうした外的要因と共に、先述の如き、国内的事情が、近代初頭を飾る大航海時代を形作ったポルトガルの海外雄飛にかげりを見せることになってしまったのである。

インドネシア地方に、イスラム教が浸透して行っただけさつについては、本研究紀要第38号で見た如く、交易を主としたイスラム商人の商取引に付随した形で入ってきたため、自然な形で、それ程大きなトラブルもなく広まって行っただけところにその特徴がある。

これに対して、キリスト教は、それを前面に出しての海外雄飛であったため、最初は、互いになんのことか分からず、これを受け入れていた人々も、その持つ意味を知ってからは、それに抵抗する者も出てきて、これを、また、力で抑えようとし、それに対し、また、抵抗すると言う悪循環を生むことになったこともある。

そうしたアジアにおけるキリスト教の在り方、布教については、その根底にあるのが十字軍的信仰に対する情熱である。

スペインも同じと言えるのであるが、キリスト教と探検・交易が表裏一体となった海外雄飛は、我が国に見られるキリシタン禁教令や鎖国を生むと言う一面を見せるものであった。

従って、キリスト教の側、この場合、ポルトガルのそれなのだが、それが前面に出れば出るほど、イスラム教徒の多い地方では、政治的にも交易の面でも支障を来し、結局、布教について、ポルトガルと比べ淡泊なオランダにその地位を取って代わられるのである。

2

言うまでもなく、キリスト教は、イスラム教より早く興っている。

従って、イスラム教の側では、ユダヤ教と共にキリスト教を先行する信仰として敬意を表していたのだが、そのあまりにも早い浸透、それは、キリスト教世界を塗り替える形で行われたため、キリスト教の側としても、これをなおざりにしておくことが出来なかった。

そのために、早くから、その排除のための戦いが行われ、それは、フランクFrank王国のカルールKarl (Charlmagne 741—814 在位771—<フランク王国>, 800—<西ローマ帝国皇帝>) 1世の南仏、スペインでのイスラム教徒（モーロ、ムーアMore）との戦いをするることによってその地歩を固めたことに始まる。

そして、キリスト教の歴史の中で、11世紀末に始まり、約2世紀にわたって行われた十字軍の活動は世界史的に見て画期的な出来事である。互いに一神教を奉じ、イスラム教の側としては、イエスを予言者の一人として認めると言う立場をとっているのだが、キリスト教の側が聖地回復、東ローマ（ビザンチンByzantin）帝国の救援と言う目的で以て武力を持った巡礼が、断続的とは言え200年間と言う長い間、東方に向かって進軍し、そこで両教徒の間での戦いが繰り返されたのである。そして、やがては、初期の目的を逸脱したと思われるものも出てきて、十字軍とはなんだったのかと言うことを考えさせられるキリスト教が仕掛けたイスラム教との争いがあった。

そこには、単に、イスラム教徒を不倶戴天の敵と言うキリスト教徒側の怨念のようなものだけが強調されるのであって、それを討つために神の名によってという名分の下でそれが行われたと言うことで、特に、そうした大義名分ということのみを感じさせられる十字軍であった。

もっとも、更に、そのうえ、そこには政治的なもの、また、利益を求めてと言う経済的要素、そして、未知の世界を知りたい等と言う神とは関係のないもっと世俗的なものが、それを動かす原動力として存在していた面があった。

1095年、クレルモンClermontの宗教会議で教皇ウルバヌスUrbanus 2世(1042頃—99頃 在位1088—)の提唱によって翌年から始まった遠征に、西ヨーロッパの王侯・貴族を始め、色々な階層の者が参加したのである。

その背景にある、「聖ヒエロニムス（教父、419没）は巡礼を信仰の証しと考えたが、欠くことができないものではないことも認めている」⁽¹⁸⁾と言われるように必ずしも義務ではないが信仰の篤さを示すものとして古くからあった巡礼の習慣がそうさせたということであり、そうした中で、時に、彼らが持参した財産を狙って襲ってくる土地のイスラム教徒に対し武力行使をすることもあったと言うことに基因しているのである。

そして、イスラム教徒に対する無知と、そこから生まれた誤解が、「かれらを正真正銘の異教徒、偽の神々（マホメット、アポロおよびテルヴァガン）とその偶像の崇拝者である不信者としてえがき出している。このようなネガフィルムは、第一回十字軍にはかなり普及していたようだ」⁽¹⁹⁾と言う指摘にあるように、歴史的な大事件である十字軍に無知とそこから生じる偏見、そして、キリスト教徒の側の誤解と思い上がりが底流としてあったと言える。

そして、それが宗教的情熱によって行われたと言うところに、十字軍の性格があると共に

その^{こわ}恐さを感じさせられるのである。

そして、「巡礼に贖宥(罪の赦しではなく、赦された罪のつぐないとしての苦行を免除すること)を与える約束で、エルサレムの神の教会を解放するすべての人々に与えるものである」⁽²⁰⁾と言う大義名分と、「十字軍は一つの閉鎖的な社会内で不寛容の精神を強めていた」⁽²¹⁾と言う指摘がなされるような背景から、宗教的信仰の篤さの証としての聖戦であればある程、その名の下に行われた十字軍の戦士の行動は、可成り過激なものがあつた。

そして、これを受けて立つイスラム教徒の側からするならば、これまでも、巡礼と言う名の下に行われた小競り合いにはあつたものの、突然の如く襲ってきた災難と言わざるを得ず、侵略戦争の何ものでもなく、聖戦の名の下で行われた十字軍は、聖戦が強調されればされる程、その過激さ、残虐さが指摘されるのである。

だが、それを行うキリスト教徒の側には、人を殺すことに対する罪の意識はおろか、逆に、神に祝福された善行として、自らの行為に誇りを持っていたのである。

彼ら十字軍戦士の活動については、ヨーロッパにおいては、聖戦として扱われることが多いが、一方、これを受けてたつ側からすると侵略戦争であり、こうした側面から見た十字軍については、『アラブが見た十字軍』⁽²²⁾にその詳細を見ることが出来る。

それは、聖戦と言うには程遠いものであると言わざるを得ず、宗教的情熱に基づいた人間の行動の^{こわ}恐さを感じさせられるものである。

そして、十字軍の遠征に続く時代から始まったポルトガルによる海外雄飛・探検事業は、それに伴うキリスト教の布教により、それはアフリカ、インドを経て東南アジアへも伝播するが、交易による利潤追求と表裏一体、時に、それを前面に出して行われたところに、同地方におけるキリスト教の浸透が、イスラム教のそれと比べて、趣きを異にしていると言わざるを得ない。

マルコ・ポーロ Marco Polo (1254—1324) 父子、叔父によって行われた旅の目的が、元朝へ、「キリストの律法に通じ、七芸に通じ、そのうえ十分議論を闘わすだけの才能を持った賢者」⁽²³⁾を連れて行くと言うことと、「エルサレムの聖墓の上に燃えるランプから聖油を持ち帰る」⁽²⁴⁾ことであつたということから、キリスト教が、既に、中国に伝えられ、理解されていたと言うことが分かるのである。

賢者達100人と言う要請にも関わらず、「法王は(中略)二人の伝道僧を託したが、この二人は学識の高い僧であつた」⁽²⁵⁾と言うように、2人だけがアジア、中国に向けての旅に同行したのだが、「二人は信任状も宸書も持ってきたものの一切をニコロ氏とマッテオ氏に手渡し、テンプル僧団の隊長といっしょに引きかえしてしまったのである」⁽²⁶⁾と言うことからすると、当時と、反宗教改革運動時代の布教に対する姿勢の違いが大きいと言うことが言える。

そして、積極的にヨーロッパ人によって対外的に布教活動が行われるようになったのは、

大航海時代においてであって、そこには、未知の世界を知りたいと言うことと、アジアへ行って富を得たいと言う物欲と共に、大航海時代を形づくるのに大きな役割を果たしている「プレスター・ジョン」伝説についての抜きがたい信仰が介在していたのである。

その先駆をなしたのが、ポルトガルであり、エンリケ航海王子なのであって、「エンリケはまた十字軍という純真なキリスト教精神に燃えており、回教世界に強烈な一撃を与えると共に異教徒を改宗させたいものと願っていた。彼は死ぬまで、この漠たる東洋やエチオピアにあるという伝説的な聖職王プレスター・ジョンの国、マホメットの家来によって長い間キリスト教圏から隔離されて来た国を見つけ、それによって回教圏を巨大なやっとして挟撃にしたいと望んでいたのである」⁽²⁷⁾と言うように、彼も時代の子であり、彼の行動、事業の根底には、常に、「プレスター・ジョン」信仰を伴ったキリスト教精神の横溢と、その背後にあるイスラム教に対する怨念ともいべきものが存在していたのである。

「プレスター・ジョン Prester John」

中世紀のキリスト教伝説で、アジア或いはアフリカにおけるキリスト教君主と信じられた人物。アジアの王としては、オットー（フライジングの）の年代史《Chroniconete.1146迄》には、ペルシアおよびアルメニアの彼方に居住し、ネストリウス教徒で、十字軍出征の際にエルサレムを救援に来たと記し、またマルコ・ポーロによれば、彼はタタール王汪罕汗（Ur-khan或いはWang Khan）であるという。アフリカの王としては、14或いは15世紀のエチオピア王で、ポルトガル王ジョアン2世はインドへの航路を求めた際に、彼と誼みを結んだという

『西洋史事典』⁽²⁸⁾

1498年ヴァスコ・ダ・ガマがインドのマラバル海岸カリカット港に投錨したとき、インド人にこの地方でなにを捜すのかとたずねられ、「キリスト教と香辛料」と答えたと言う故事に対応する、物欲と魂の問題がヨーロッパ、特に、ポルトガルの東航によるアジア進出には、そこでの富の獲得と共に、キリスト教＝カトリックの布教が大きなものとしてあり、西航の成功者コロンブスの航海もキリスト教の布教をもその大きな目的としているのである。

エンリケ航海王子にとって、自らが参加し、その海外雄飛・探検事業の中で、彼自身にとっての数少ない対外戦争で、現在は、スペインの海外領である北アフリカのセウタCeutaの攻略（1415）がある。

それは、「セウタがリスボンの海商達を襲うモーロ人の海賊の巣窟であり、海賊を殲滅することは海商の利であり、またイスラム教徒を殺すことは、ローマ教皇を喜ばせる、キリスト教側の正義の十字軍運動であった」⁽²⁹⁾と指摘されるように、彼の海外雄飛・探検事業の根底には、彼自身の宗教的使命観、それも、イスラム教徒との対立の中にあるそれが存在していたのである。

そこには、「彼にはセウタで勝利の喜びのなかで騎士叙任を受けたという誇りがあった。し

かし同時に、弟であるフェルナンド王子をタンジールでイスラム教徒の手にゆだねなければならなかった屈辱は、彼の心に大きな傷跡を残した」⁽³⁰⁾と言われる如く、キリスト教についての篤信を根底にしているとは言え、イスラム教徒に対する個人的感情が問題として介在していたのである。

そして、そうした彼自身の宗教的情熱と個人的問題を根底にした海外雄飛・探検事業は、イスラム教との関わりを強くするものであり、そうした観点からすると、彼にとって、アフリカと言うものの持つ意味は大きいと言えるのである。また、その存在は古くからは知られていたにも関わらず、身近かにありながら、未知の世界でもあったからである。

事業を遂行するうえで、彼は、「攝政ペドロ王子に対してこの地域への独占航海権と輸入品、戦利品の5分の1を税として徴収する権利の下付を要請して認められた」⁽³¹⁾と言うように、実利の面での保証を得ると言う準備をすると共に、一方では、「この事業を十字軍的事業として行なう決意をかため、ローマ教皇エウゲニウス四世にキリスト騎士団の団員の贖宥を請願して許された」⁽³²⁾と言われるように、彼自身の宗教についての真情、また、行動の精神的裏づけとしての教皇によるお墨つきを得ているのである。

従って彼の海外雄飛・探検事業は、常に、宗教的であり、十字軍的事業と言うことから、そこには異教徒、それは当面、イスラム教徒であり、それに対する対抗意識が強くあったと言えるものであった。

それは、「ローマ教皇から下付された勅書の内容(つまりそれは国王アフォンソ五世を通じて伝えられたエンリケの希望でもあったわけであるが)から判断すると、彼がイスラム教徒に対して強い敵愾心を抱き、マグリブから日本にいたる地域にキリスト教帝国を建設しようと考えていたことが明らかになる」⁽³³⁾と指摘を受けるものであった。

そこには、弟を見殺しにせざるを得なかったと言うことで生まれた個人的感情が存しており、これが彼の海外雄飛・探検事業を行う動機づけになったことも十分に言えるのである。

そして、そうした個人的感情をないまぜにした事業を宗教を前面に掲げて行おうとしたわけで、これは、把え方によっては、彼の事業は個人的感情に基づくキリスト教による世界征服とも言えるもので、他の地域の者、また、異教徒にとっては恐ろしいことであった。

こうして始まったエンリケ航海王子の海外雄飛・探検事業の精神は、後に続く者にも言えるわけで、それは、単に、ポルトガル人のそれに止まらず、コロンブスに始まるスペイン人によるそれも規を一つにしていると言えるのである。

そのため、こうしたヨーロッパ人による攻勢とも言える進出によって、これを受け止める新世界やアジアの諸地域では、それまで保持していた社会体制、秩序を根底から潰えさせられ、キリスト教的秩序体制の大波を受けるようになって行くのである。それも強圧的に。

こうしたキリスト教的秩序体制の波は、エンリケ航海王子やそれに続く為政者、そして、

それを具現したコロンブスやヴァスコ・ダ・ガマ等についてもさることながら、時恰も、宗教改革の時代であり、この宗教改革に対抗して生まれた反宗教改革運動の中にも見られるのである。

イングランドEnglandのウィクリフJohn Wycliffe (1320頃—84) やボヘミアBohemiaのフスJan Hus(1371頃—1415)等宗教改革の先駆をなした者達はともかくとして、ルターMartin Luther (1483—1546) や、同時期、後述のイエズス会の二人と共に在り、面識もありながら、意見を異にして、相入れなかったカルヴァンJean Calvin (1509—64) 等による改革の運動は、キリスト教界に、プロテスタントという新たな派閥を生む一方では、教会自身による内部からの肅正の動きを惹起し、そうした中からロヨラIgnatius de Loyola (1491頃—1556) やザヴィエルFrancisco de Xavier (1506—53) 等によるイエズスJesus（ジェスイット、ヤソ）会などの反宗教改革運動が展開されるのである。

スペイン、ナヴァラNavarraの城主の三男であるザヴィエルは、宗教改革の空気の中で、パリに留学し、そこで、ロヨラと邂逅、その主唱の下に同志7人と共に、禁欲、修業、異端折伏、海外布教を目標にしたイエズス会を設立（1534）し、教皇パウロPaulus 3 世（1468—1549 在位1534—）の認可を得る（1540）。

そして、それは、教皇の至上権を再確認し、厳格な軍隊的規律の下に、宗教改革運動によって失われた教会の権威の回復に資するためのものであり、そのために、これに携わる者には、信仰心の篤さと、それに基づいた行動力が求められたのである。

1541年、「臣下が勇氣と冒険とによって勝ち得た東洋の植民地を神の支配に移したいというのであった。神の支配とは、現地人の信仰する“異教”を改宗させて植民地支配の拡大と安定をはかることだったのである」⁽³⁴⁾と言われるジョアン3世（1502—57 在位1521—）の植民地支配についての考えに基づいて、東インドの布教活動にイエズス会士の登用を決めたことに呼応して、35歳のザヴィエルはアジアに向けて布教の旅に発ち、翌年、インドに到着するのである。

そうしたザヴィエルのアジア行の背景には、「とくに潤沢な収入源の基地として確保しているインドのゴア、マレーシアのマラッカなどを中心とする東洋植民地支配深化の手段としてキリスト教の伝道を利用しようとしたのである。これは教義を世界に広げようとするイエズス会の熾烈な使命感と連携するものであり、『胡椒と救霊』といわれたように、キリスト教の布教と胡椒に象徴される富の導入は、植民地支配の両翼をなすものだった」⁽³⁵⁾と指摘される、ポルトガル、ジョアン3世の植民地支配に対する考え方、そこに、「イエスの軍隊」と言われるイエズス会の在り方が合致したと言えるのである。

ヴァスコ・ダ・ガマ以来、営々として築き上げてきた植民地の強化のためにキリスト教を利用すると言う一面的なものだけではなく、エンリケ航海王子を始めとするポルトガルの海

外雄飛・探検事業には、常に、車の両輪の如く、未知の世界の探求と共にキリスト教の布教は不可分のものとして存在してきているのである。

そうした意味では、ザヴィエルのアジア行もそうした伝統に則ったものと言えるわけである。

ポルトガルの海外雄飛・探検事業の地、特に、東南アジア、そこには、サラセンと言われるアラビア人、ペルシア人、また、インド人、そして、彼らによって感化された土地の人間と、イスラム教を信仰する者が沢山おり、彼らの多くは商売に携わりながら、自然な形でイスラム教を信仰することとなり、その伝播に重要な役割を果たしたのである。

因より、前号で見た如く、同地におけるイスラム教の伝播について、時に、意図的に行われたこともなくはない。

商売をやっていた者の中には、その地理的条件から、海上交易に従事する者も多く、彼らは、東南アジアの物産、中でも、ヨーロッパ人にとって重要な意味を持つ、香辛料の取引を始めとする交易のための商業圏を確立していた。

そうした中に、ポルトガル人が新たに参入してきたのである。そして、そこへ、西航によって同地へ現れるようになったスペイン人も加わるようになり、その関係は更に複雑化するのである。

交易上の権益をめぐって、しばしば、力による対決が行われ、それは大筋においてポルトガルに有利に展開し、先発のサラセン、インド人、土地の民は次第にその権益を奪われ、やがて、植民地化されて行く中で、キリスト教が大きな役割を果たすことになり、ザヴィエルがその先兵として活動することになるのである。

1541年4月7日、35歳の誕生日を迎えたザヴィエルは、教皇特使（代理）の肩書を以て、2人の同志パウロ・カメリ（年代不詳）とフランシスコ・マンシリャス（年代不詳）と共に「コインブラのイエズス会学院80名のうち12名をつれて」⁽³⁶⁾アジアへ向って戦艦「サンチャゴ号」に乗船し、ポルトガルを出発するのである。

途中、モザンビークMocambique、メリンディ、ソコトラSocotra（島）を経て、1542年5月6日、ゴアに到着、南インドのヒンドゥ（バラモン）教の聖地として有名なコモリンComorin岬と、ポルトガル人によって開港されて間もないトゥティコリンTuticorin周辺の海岸を中心として活動を展開する。

セイロン（島）にも布教の足を伸ばした後、1545年、モルッカ諸島での布教の見通しが立ったことを知ると、マドラスMadras（現・チェンナイChennai）を経由して、同年5月、マラッカに向けて出発。

1546年1月には、マラッカを発ちモルッカ諸島に向い、翌月、アンボイナ島に到着、ここを足場にして、更に、テルナテ（島）やその他の島々で超人的な活動をする。そして、アン

ボイナ島には翌年にも再び訪れているのである。

翌年6月、マラッカに戻り、そこで3人の日本人と会い、日本行を決意、1548年、マラッカからゴアに戻り、日本行の準備をして、1549年4月、ゴアを出発、同年6月、マラッカから日本への途につくのである。

彼が勢力的に布教活動を行ったインドや東南アジアのポルトガル人社会は、「性根の腐っていたのは官僚政治だけではなく、教会も同断であった。ゴアが後年、神権政治にまで肥大化したことは何人も否定し得ないところである。ポルトガルの支配の最初から征服者達は土着の色々な宗教に対して驚くべき鋭さしか示さず、彼等の狭量さはヒンドゥー教徒の伝統的寛容とは全く背馳していた。異端審問の導入と政府自身の大っぴらな公式改宗局への変身は、宗教的頑固さとキリスト教会の墮落を助長したし、また一方では、ポルトガル領印度の教会や修道院は植民地の富の大半を吸い上げていた。教会は教会として東方における永遠の絶大な権力ではあったが、その世俗的な面が本来の機能を上廻った時、教会に関する万人にとっては一つの悲劇になるのである。」⁽³⁷⁾と言われるものであった。

従って、こうした地域の大勢の中で「イエスの軍隊」の先兵として布教活動に従事する彼は、「インドでは植民地キリスト教会の腐敗と闘い、イスラム教社会では圧制を逃れる目的で受洗するカースト階級の漁師の中で活動し、文盲のキリスト教徒のため、子供達に歌を教え、その子供達の歌を通して聖書の『福音』を教えるというものであった」⁽³⁸⁾と言われるものであった。

ヨーロッパは、文化的にも、宗教的にも爛熟期に入っており、その背景として、大航海時代を迎えヨーロッパへ流入した富があり、これがルネサンスの文化を生んだわけであるが、ルネサンス運動の保護者の役割を果たした教会が豊かになると、神に仕えるはずの聖職者達の中には、教会権力のもとで、贅沢な暮らしに明け暮れる者もいた。その点では、教皇自らがその範を示していたと言わざるを得ないのである。

従って、「一方でルネサンスの新しい波は、腐敗して行く教会への批判としても発展し、キリスト教プロテスタント派となって勢いづいた。イエズス会を誕生させる素地ともなるのである」⁽³⁹⁾と指摘されるように、流入した富を背景に、教会は、ルネサンス運動を展開させるうえで大きな役割を果たしながら、それをすればする程、自らに跳ねかえってくるものが大きくなり、やがては、足元を掬われるようにプロテスタントの徒を生み出す結果をもたらしたのである。

その点で、こうした世の中の動きの中でルネサンスの担い手であり、その代表的人間の一人であり、後世に名を残す仕事をしたレオナルド・ダ・ヴィンチLeonardo da Vinci (1452—1519) 等「万能の天才」達は、こうした世の中の動きについてどう考えていたのだろうか。

日本布教に関するザヴィエルについて、「民衆への布教は、僧侶たちの墮落した私生活を激

1541年の日本 リスボア(ン) ポルトガル

しく非難することのほうが、仏教の偶像崇拜などに対する論理的な攻撃よりも効果的だったのかもしれない。いずれにしても生涯不犯を神に誓って禁欲生活をおくっている神父たちにとっては、一夫多妻とか男色などの性風俗が、特別不愉快にうつるのである」⁽⁴⁰⁾と、仏教僧達に見られる、本来あってはならない女色や男色と言う堕落した姿を攻撃するところから始まり、一夫多妻の習慣を非難することで女性の支持を得、市井の人々に親しく接し辻説法を行い、偉そうに構える仏教僧に対抗して信者を増やして行ったのである。

だが、一方では、「それまでの伝道は主として個人を対象にし、徐々に布教していく方法をとっているが、日本ではまずトップを説き落とすことから始めている。効率をねらったこの布教の方法をもちいたのは、日本人が支配者に従順であり、単位集団で行動し、ものを考えるという習性をもつと見たからに違いない」⁽⁴¹⁾と言う指摘の如く、朝廷や幕府に働きかけたが、これは功を奏し得なかったため、地方の権力者である山口の大内義隆とか、豊後(大分)の大友義鎮(宗麟)と言った大名と結び、彼らを信者としたうえで、それぞれの地にキリスト教文化を根づかせたのである。

こうした、権力者と結びつくと言う彼の布教態度、これを布教戦略と言うことが出来るかも知れないが、こうした戦法は、効率を考えた場合有力であり、拗攬期を過ぎた信仰集団には良く見られることで、あながち、ザヴィエルのそれは珍しいものではないと言える。

そして、日本における彼の布教活動にしても、結局、「彼の布教活動がポルトガル王の勢力下、その庇護によってのみ可能だったという事実が見逃せない」⁽⁴²⁾と言うように、彼自身、清貧に甘んじ、純粹に信仰に燃えていたとしても、彼が置かれている立場は、教皇から認可

された「イエスの軍隊」としてのイエズス会の一員で、それも、教皇特使（代理）という肩書をもつてのそれあり、かつ、ジョアン3世の要請に従つての布教活動であるため、その行動は、自ら、その枠の中でのそれと言うことになってしまうとしても、致し方ないと言わざるを得ないだろう。

「いずれにしても布教事業と植民地市場の維持拡大というポルトガル政府の打算は一体不離の関係にあった。宣教師たちはポルトガル艦隊に同乗しての渡航であり、現地での旅費・生活費がすべてポルトガル政府から支出されたのだ」⁽⁴³⁾と言われるところに彼らの持っている立場があったのである。

従つて、ザヴィエル自身も、アジアへ赴任するに当って、「全長約50メートル、3人がかりのオール50挺で最大時速7,5ノットで走る“浮かぶ砲台”といわれた戦艦である。植民地支配のためにはこうした武力を配置することも必要だった」⁽⁴⁴⁾と言われる軍艦によってであると言うところに、その布教の姿勢が窺えると共に、ザヴィエル自身このことに疑問に思わなかったのだろうかと言うことを考えさせられる。

その点に関して、『『イエスの軍隊』といわれる冒険的なイエズス会の宣教師として新しい人生を踏み出したザビエルが東洋派遣の要請を受けたとき、33歳だった。剽悍にして企業心にとみ、冒険家、探検家を輩出したバスクの血をひく彼には、ふさわしい任務だったといえる』⁽⁴⁵⁾と言われることによって疑問は氷解される思いがする。一方、「ポルトガルの植民地政策に相乗りするかたちで、自身は神の使徒としての崇高な目的をとげようとしたところにザビエルの苦しい立場があった」⁽⁴⁶⁾と言うように、ザヴィエルのアジアでの布教は、何と言つても、ポルトガルの植民地政策の一環として行われたと言うことは否定し得ないところである。そのために、彼にも一面の悩みがあったと言うことである。

そうした彼に、「ザビエルが、個人としては謙遜で、控えめでありながら、異教徒に対して無意識のうちに優越感を持っていたことはどう見ても残念なことである。キリスト教徒として、また、ヨーロッパ人として、彼は自分が正しくアジア人と異教徒はまちがっていると確信していた。ユダヤ教徒やイスラム教徒は言うに及ばず、ヒンズー教徒も仏教徒も人間として犯しがたい価値があり、神の恵みの道を相携えて歩んでいることを認めようとせず、異教徒は偶像崇拜と迷信のわなにかかっている者で、つまり悪魔の仕業だと思っていた」⁽⁴⁷⁾と言う批判的見方がなされるのである。ここにキリスト教布活動の本質があるかも知れない。

彼自身、信仰、布教に熱心であればある程、それと比例してその傾向を強めることになるのである。彼の布教して歩いた、日本を含むアジアの地には、古来、一神教とは違う信仰の体形があり、これが日常の生活と結びつき、社会の秩序を形成しており、その点では悪魔の仕業が行き渡っていた世界であり、それを如実に示していたのが仏教僧の堕落ぶりであり、そのため、増々彼の信仰心を駆りたてたと言える。

従って交易と布教と言うと言う形で行われたポルトガルの海外雄飛・探検事業は、布教を強調すればする程、それぞれの地域の社会秩序を破壊するものとして、強い抵抗を受けるのである。その点で、同じ一神教ながら、先行したイスラム教は、キリスト教と比べ、もう少し穏やかな形で受容されて行ったと言える。

その辺りについては、豊臣秀吉の禁教令（バテレン追放令 天正15年 1587）や徳川時代の鎖国（海外渡航禁止令 寛永12年 1635, ポルトガル船来航禁止令 寛永16年 1639）等の例を見れば自ら理解が出来ると言える。

ポルトガル、スペインのもたらした、キリスト教を伴った海外雄飛・探検事業は、アジア各地に多大な影響を与えることとなり、それは、これらの地域の既成概念からすると如何にも危険なものであったわけで、彼らの武力を伴う進出によって、そして、その後に続くオランダ、イギリス、フランスの攻勢の下に多くの地域が植民地化されて行ったことを見れば一目瞭然であり、それに加担したのがキリスト教だったのである。

その点で、秀吉や家光の措置は、日本の植民地化を防いだと言う点では先見の明があったと言える。

そして、インドネシア地方も植民地化の波に呑み込まれてしまうのである。だが政治的にも、経済的にも、また、宗教的にもあまり魅力のなかったバリ（島）にはポルトガル人は積極的に近づくことはしなかった。

モルッカ諸島や東チモールにはキリスト教徒になった者が多くいると言うのに。もっとも、筆者は、バリ（島）でカトリック信者とも知り合いになった。

後に続くオランダは、バリ（島）を含むインドネシア地方を植民地としたのである。

結

以上見てきた如く、近代を形づくった大航海時代、ルネサンス、そして、宗教改革、この一連の出来事は、それぞれが時を同じくして起り、それぞれが連動し合いながら近代と言う時代を作り上げたのである。

人間の持つ「欲」が、ヨーロッパの人々、その最初はポルトガル人であったのだが、彼らを海外へ雄飛させ、目指すは、マルコ・ポーロによってもたらされたアジア、そして、そのはずれにある黄金に満ちた日本（チパング）へ行って、自らもそれを手に入れたと考えた冒険者達の夢をかなえようとしての行動が大航海時代を現出することになった。

黄金に満ちた日本についての夢は必ずしも満たされたわけではないが、彼らの行った航海と探検によってもたらされた富は、ルネサンス活動の大きな源動力となり、そこに、後世に残る数々の芸術作品を創造したのである。

そして、それらが偉れたものであればある程、ルネサンスの華々しさが強調されるのだが、

それが素晴らしければ素晴らしい程、ルネサンス活動の推進者である教会の財政を圧迫し、その打解のための贖宥状の乱発が、教会の土台をゆるがすことになり、プロテスタントと言う新しい派閥を招来し、キリスト教の再編がなされるのである。

こうした躍動の時代を迎えたヨーロッパで、逸早く海外雄飛に乗り出したのがポルトガルであり、イベリア半島を占拠するイスラム教徒を排除しての建国は、以後、事あるごとに、イスラム教徒との確執を生むのである。それは、地理的に近い所にイスラム教徒がいたと言うことと共に、ポルトガル人、これはヨーロッパ人全体に言えることであるが、十字軍精神が彼らの心の中には植えつけられていたからである。

そして、彼らが目指すアジアへの進路にはこのイスラム教徒が自らの生存をかけて存在していたのである。

自らの国土を、歴史の中では、イスラム教徒に占拠されていたヨーロッパ人は、これを排除して自らの信仰するキリスト教を世界に広げることこそ神意にかなうものであるとしたため、他の民族の思わくなど考えることなく、自らの信仰を押しつけて行ったのである。

そのため、色々な所で抵抗に会うが、結果的に、例外はあるものの、力によるキリスト教の布教は、一応、成功したのではないかと思わせる程、世界に広まって行ったのである。

こうした中でインドネシア地方は、イスラム教が強固に根づいていたため、キリスト教の力による布教にも関わらず、依然としてイスラムの世界を形成しているのである。従って、それが如何に強く根づいているかと言うことが分かる。

バリ（島）はどうかと言うと、イスラム教の伝播の時もそうだったが、魅力に乏しい島と言うことで、キリスト教の東漸に際してもあまり影響を受けることなく、相変らず、バリ・ヒンドゥー（バラモン）の世界を保っているのである。

注

- (1) 赤井彰「ポルトガル史」 井上幸治編『南欧史』 山川出版社 1957 4頁
- (2) Boies Penrose *Travel and Discovery in the Renaissance 1420—1620* New York 1962
 荒尾克巳訳『大航海時代 旅と発見の二世紀』 筑摩書房 1985 44—5頁
 - ・「いわゆる研究所があったというわけではない」（生田滋『ヴァスコ・ダ・ガマ』 原書房 1992 12頁）
 - ・「『サグレス航海学校』や天文台を設立し、初期ポルトガルの大航海時代を一手に担い、コロンブスやヴァスコ・ダ・ガマの航海に道を拓いた偉大なる王子として描かれるようになった」（金七紀男『エンリケ航海王子』 刀水書房 2004 Ⅷ）。そして、日本では、和辻哲郎『鎖国—日本の悲劇』が「開明的な人物として高く評価した。（中略）日本におけるエンリケ像はこの『鎖国』によるところが大きいと思われる」（金七 同上書 Ⅸ—Ⅹ）
 - ・和辻哲郎『鎖国—日本の悲劇』（上・下）岩波 2003 がその辺りの王子像を描いている。
 - ・以上のような、従来、喧伝された理想的な王子像より、多少割り引いた王子像が語られるようになってきた。
- (3) 生田 前掲書 12頁

- (4) 同上書 12頁
- (5) 金七 前掲書 91頁
- (6) 同上書 139頁
- (7) 同上書 139—40頁
- (8) 生田 前掲書 47頁
- (9) 同上書 125頁
- (10) 永積昭『オランダ東インド会社』 講談社 2000 31頁
- (11) 河部利夫『東南アジア』 河出書房新社 129頁 また、ポルトガルのマラッカについては、永積昭「東南アジアの植民地化—インドネシアの場合—」21 岩波講座『世界歴史』16 1974で記述されており、「ポルトガル領マラッカは、ビルマから米を買って、モルッカ、アンボンに、補給しなければならなかった。西洋到来以前から、モルッカは香料をジャワの米と交換して生きていたからだ」鶴見良行『マラッカ物語』時事通信社 1994 と、モルッカ（香料）諸島の特徴との関わりでも記されている。
- (12) Penrose 前掲訳書 75頁
- (13) 同上書 76—7頁
- (14) 同上書 77頁 そして、「テルナテ島とティドール島のスルタンとの拮抗がポルトガル人に利をもたらした」と言われるのである。増田四郎『大航時代』講談社 2001 172頁
また、生田滋『大航海時代とモルッカ諸島』中公新書 1998 にポルトガルを中心にしたこの地域の島々の関係を知ることができる。
- (15) 同上書 78頁
- (16) マカオについては、東光博英『マカオの歴史』大修館書房 1998、浅井信雄『マカオ物語』新潮社 1997 等の著書がある。
- (17) Penrose 前掲訳書 89頁
- (18) Cécile Morrisson *Les Croisades* 橋口倫介訳『十字軍の研究』白水社 1974 13頁
- (19) 同上訳書 20頁
- (20) 同上訳書 25頁
- (21)
- (22) Amin Maalouf, *Les Croisades vues par les Arabes*, Editions J.C.Lette's 1983 牟田口義郎・新川雅子訳『アラブから見た十字軍』Libro 1986 また、十字軍に参加した人々については、Régine Pernoud, *Les Hommes de la Croisade*, Librairie Jules Tallandier 1982 福本秀子訳『十字軍の男たち』白水社 1989 に詳しい。
- (23) 青木一夫訳『全訳 マルコ・ポーロ 東方見聞録』校倉書房 1997 11頁
- (24) 同上訳書 11頁
- (25) 同上訳書 14—5頁
- (26) 同上訳書 15頁
- (27) Penrose 前掲訳書 44頁
- (28) 京都大学文学部西洋史研究編『改訂増補 西洋史事典』東京創元社 昭和43
- (29) 中村明『海の世界史』講談社 1999 29頁
- (30) 生田 前掲書 17頁
- (31) 同上書 13—14頁
- (32) 同上書 13頁
- (33) 同上書 17頁
- (34) 古川薫『ザビエルの謎』文藝春秋社 1997 48頁
- (35) 同上書 49頁 1330年代、モルッカの住民が、イスラム教徒に苦しめられているので、解放してくれるのならキリスト教に改宗しても良いと申し出たと言う。（生田前掲書）ポルトガル人社会については松田毅一『黄金のゴア盛衰記』中央公論社 昭49 にふれられている。

- (36)
- (37) Penrose 前掲訳書 90頁
- (38) 同上訳書 90頁
- (39) 古川 前掲書 47頁
- (40) 同上書 88頁
- (41) 同上書 79頁
- (42) 同上書 78頁
- (43) 同上書 78頁
- (44) 同上書 60頁
- (45) 同上書 49頁
- (46) 同上書 48—9 頁
- (47) ピーター・ミルワード 松本たま訳『ザビエルの見た日本』 講談社 1999 165頁 そして、
「ポルトガルはゴアを多年支配したが、住民のキリスト教化という至難の業であったことが判
明する。著者は、この現象（モザンビク、アンゴラも変わらない）と、16世紀に、同じ企図を
もって海外に進出したスペインの旧植民地メキシコ、フィリピン等におけるキリスト教化のそ
れとが、大きく相違していることに多大の関心を抱かざるを得ぬのである」（松田 前掲書 53
頁）と言われるが、ここにポルトガルの布教活動の状況が窺い知れる。

Research Note

The Social Climate and Linage in Bali

Masamichi MATSUBARA

Last time, I tried to research the penetration of Islamic from Arabia to Indonesia area. Islamic penetrated to Indonesia area by Saracen (Arabian and Persian) and Indian merchant with their activity peacefully.

Overseas development was urged according to the exploration enterprise by the Henry (Henrique) voyage royal prince of Portugal, and Christianity was transmitted by future adventure persons. In it, work of Xavier has contributed to Christianity fixing of the subsequent method of the said place greatly.

In this paper, consideration was advanced focusing on propagation activities of the voyage exploration enterprise of Portugal, and Xavier's activity of with Portugal overseas development.